

事例



宮里曉美

●不思議なものを見つけたよ！ 何だろう？

十月の園庭でのこと。「変なのがあるよ。来て！」とI夫が大きな声で私を呼びました。大急ぎで駆け付けると「ほら、これ見て。何だろう？」とI

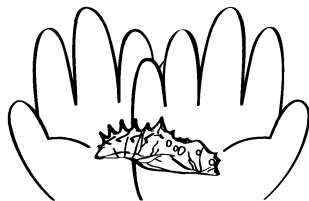
夫が目の前草むらを指さしました。その指の先にあったのは、不思議な形をした何かでした。私にとっても初めての形。

「何だろうねえ」と言っても、黒いところがみ込んでよく見ると、黒いところが銀色に光る点々がありました。それを見て気が付きまし

た。虫に詳しい友人から教えてもらったことがあったのです。

「これはツマグロヒョウモンっていうチョウのサナギだと思うよ！」と興奮して伝えると「そうなんだ。これサナギなんだ」と、I夫は少し驚いた顔になりながらうれしそうに言いました。

I夫と私のやりとりに気付いて他の子どもたちも集まってきました。その中にR夫がいました。虫好きのR夫は、I夫が手にしているサナギをじっくりと見つめていました。しばらくしてI夫は「みんなに見せてこよう」と言っ、サナギを持って立



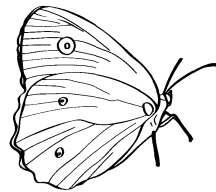
ち去り、あとにはR夫と私だけが残りしました。

R夫は、「ぼくも見つけたいなあ。ねえ、どうい
う所にいるか知ってる？」と聞いてきました。私
が「ツマグロヒヨウモンの幼虫はスミレの葉っぱ
が好きらしいって聞いたことがあるよ。^注幼稚園に
まだいるかもしれない」と答えると、R夫はうれ
しそうな顔になり「じゃあ、一緒に探しに行こう
よ」と言って歩きだしました。

●ツマグロヒヨウモンのサナギを探す旅

R夫の熱心さに付き合う形でサナギ探しの旅が
始まりました。私の中には、そう簡単にサナギは
見つからないだろうなという気持ちと何とかして
見つけたい気持ちが入り交じっていました。

虫好きのR夫と私は、それぞれに「この辺りに
いそうだ」と感じる場所を探し始めました。そう
してしばらくたつたころ、私が夏ミカンの木の辺
りに行き草むらをのぞいて見ていると、別の場所
を探していたR夫が戻ってきて、「ここにはねえ、



▲ジャノメチヨウ

モンの幼虫はいるけど、
ツマグロヒヨウモンはどうか
な」と落ち着いた声で言いま
した。

なかなかサナギが見つか
らず困ったなという気持ち
になっていた私は、R夫の

言葉聞いてハッとしました。この場所でR夫た
ちがジャノメチヨウをよく見つけていたことを思
い出したのです。

探し場所についてのR夫の言葉は、虫をよく探
していたからこそ出てきた言葉であり、とても頼
もしく思えました。一緒に旅をする頼りになる仲
間としてR夫を見直した瞬間でした。そして、サ
ナギを見つけることだけにとらわれて旅そのもの
を楽しむ余裕を失っていた自分に気付いた瞬間で
もありました。

「そうだねえ、確かにジャノメチヨウってこの辺
によくいたよ。ということ、ツマグロヒヨウモ

ンはスマイレ！スマイレなら、お山の上にあつたと
思う」と私が伝えると、「じゃあ、お山へ行こう！」
と言ってR夫が張り切つて歩きだしました。

お山へと向かう階段を上っているとコオロギの
声が聞こえてきました。R夫は立ち止まり、しゃ
がみ込んで木の根元をのぞき込み、「この辺には
コオロギがよくいるよね」とつぶやきました。植
え込みの中に入り込み、「いるかなあ」と言つて
そつと落ち葉をどかすと、セミの羽が落ちていま
した。R夫はその羽を手にとつてじつと見つめて、
「アブラゼミだな」とつぶやきました。

ジャンメチヨウのことやコオロギのことなどに
ついて話すR夫の言葉は、とても落ち着いていま
した。セミの羽の模様を確認している表情には、
小さな昆虫学者のような風格まで漂っているよう
に思えました。

また歩きだし、お山の上に着くと、そこで同じ
クラスのK夫に会いました。「何してるの？」と尋
ねるK夫にR夫が「ツマグロヒョウモンのサナギ

を探してるんだよ」と答えると、「じゃあ一緒に探
すよ」とK夫が言い、二人は並んで歩きだしまし
た。スマイレは見つかつたけれど、いくら探しても
サナギは見つかりませんでした。

いろいろな場所を探し、隅の方にあつた水道の
裏側をのぞいていた時に、何かが動く気配がしま
した。「何かいた！」とR夫とK夫は勇んで水道の
裏側に入り込み、見るとそれはコオロギでした。

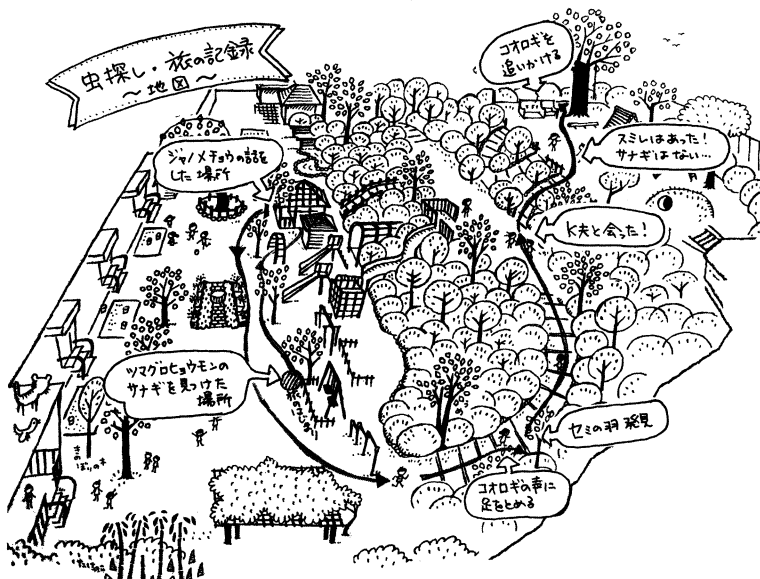
「あ、コオロギだ」「こっちにもいる！」と言いな
がら追いかけて、R夫が素早く2匹のコオロギを捕
まえました。K夫はなかなか捕まえることができ
ず、必死に捕まえようとしていました。それを見て
R夫が、そつと「俺が捕まえたの分けてやろう
か？」と話しかけました。でも、K夫は首を振つ
て「いい！」と言い、またコオロギを追いかけ始
めました。

●サナギを探していた時間のことを考える

途中からK夫も加わり三人で過ごしたサナギ探

しの旅。三十分近く探しても結局サナギは見つかりませんでした。しかし、一緒に虫探しをした私の中に、「探している時間」の中でR夫たちが体験したことは、ツマグロヒヨウモンのサナギを見つけたことだけにとどまらないという思いが残りました。「探している時間」の中で子どもが体験していることをゆつくり考えたくまりました。

子どもたちと虫とのかかわりは、見たり触れたりなど虫に直接かかわっている時間よりも、この時のR夫のように、目の前には虫は存在しておらず、探していたり、この辺で見つけたことがあると自分の経験を伝えたりしている時間のほうが多いのではないのでしょうか。虫に直接かわらない時間の中で体験していることと、虫に直接かわる中で体験していることは、つながりながら子どもの中に蓄えられ、自然とのかかわりを豊かなものにしていくように思います。R夫やK夫の姿を振り返りながら考えてみたいと思います。



〈記憶をよみがえらせる・記憶を言葉にする〉

R夫は、夏ミカンの木の辺りを探していた私に「ここにはジャノメチョウはいるけれど」と話しかけています。この時、実際にジャノメチョウが飛んでいたわけではありません。しかし、R夫の中にはこの場所でジャノメチョウを追いかけた実感がしつかり残っていたのだと思います。「この匂いがある所にはジャノメチョウがいるんだよ」とも言っていました。夏ミカンの木のそばに柿の木があり、実った柿の熟した匂いが漂っていました。匂いが記憶をよみがえらせたようです。

同じように、コオロギの声が聞こえた時も「この辺には、コオロギがよくいるよね」とつぶやいています。R夫の中には、ここには〇〇、ここでは△△と、生き物の居場所が刻み込まれています。姿が見えていなくてもそこにいる、と感じ取ることでできているのです。その場所で過ごした濃密な体験が記憶のもととなり、人に伝えたい情報に

なっていくことがわかります。伝えたい相手は誰でも構わないということではありません。同じ興味をもつ相手、旅を共にしている相手に対してだけ伝えられる情報なのだと思います。

〈変化を意識する〉

自然は日々刻々と変化していきます。季節の移ろいや天候、環境の変化などによって、虫との出会いのチャンスは大きく左右されます。子どもたちは「変化」を体で感じ取っています。

「前はいたのに」「ここで◇◇だったよ」と、経験がよく語られます。変化に気付くことによって、時間の経過を実感しているように思います。落ち葉をどかして見つけたアブラゼミの羽のように、場にはいろいろな痕跡が残っています。一枚のセミの羽を見て「アブラゼミだな」とつぶやいたR夫の目には、元気に木に止まっているセミの姿が浮かんでいたのではないのでしょうか。

〈夢中になって追いかける〉

お山の上で同じクラスのK夫と出会い、一緒に探すようになってからは、さらに動きは活発になりました。スミレの花の周りは確認しましたがサナギを見つけることはできませんでしたが、その途中でコオロギの声に気付き、姿も確認し夢中になって追いかけ始めました。

この時、素早く何匹もコオロギを捕まえたR夫は、まだ捕まえることのできないK夫に、コオロギを分けてあげてあげてを提案しますが、K夫はこの提案を受け入れませんでした。あくまでも自分で捕まえる、ということにこだわっています。五歳児としてのプライドも影響していたと思います。虫を捕まえる「虫を探さず・虫を捕まえる」という行為が「自分で言う」ということを大前提にしているからだと考えます。そのことがわかっていいるからこそ、R夫はK夫の「いい！」という拒否の言葉を静かに受け止め、K夫を見守るという行

動をとらせたのだと思います。

「虫を探している時間」の中で子どもたちが体験していること、それは過去とつながっている今という時間、刻々と変化していく自然とのかかわり、同じ目的に向かって共に歩みを進める仲間との共感、なかなか見つからないという苦しい現実、そしてあきらめない気持ちだったように思います。

自然は変化に富んでおり、虫を探しながら歩く道行きの中で予想外のさまざまな出会いがあります。コオロギやセミの羽のように見つけようと思っていたものではないものをたくさん見つけることになります。

「探す」という行為は出会いのチャンスに向かって開かれています。だからこそ、私たちはいつでも何かを探しているのではないのでしょうか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

注 本誌第二〇巻春号p.54・55「ツブキ先生の虫のつぶやき植物編」でツマグロヒヨウモンが紹介されています。